流談七教集　下

新宮圖書

へ 5
1844
2

# 炭俵序

此集を撰める孤屋野坡利牛らハ常に芭蕉乃軒に行
かよひ瓦乃窓をひらき心の泉をくみて十あまり[illegible]
乃文字の野風をもけしあへ[illegible]宗房乃[illegible]
よせる秋この二三子に序に[illegible]りて古楠に[illegible]炭と[illegible]
菴ミて[illegible]只我ほとけ宋人乃手鍛ら[illegible]へる[illegible]
あらんとこの於第に嬉のさゝやきなるを[illegible]まゝとき様に
[illegible]して今様乃書の古さより[illegible]
いつる[illegible]乃[illegible]入れしくも[illegible]つるくの物語る乃あ
ともの見[illegible]端のすり[illegible]れを[illegible]ひ立[illegible]の月
乃[illegible]出しより秋の月[illegible]しらかくぬけ[illegible]や吟[illegible]
篇ありて黄なる[illegible]の二十あまり[illegible]人見[illegible]

きつゝ[illegible]乃跡をあゆミり[illegible]れハ又くぬき炭
の[illegible]みつからしも點[illegible]をかく付侍るかの[illegible]ハ
詩乃正義より[illegible]つる五つの志[illegible]乃[illegible]
[illegible]例の[illegible]に任せ[illegible]
[illegible]芭蕉旅[illegible]乃[illegible]逢り
[illegible]を撰く[illegible]乃[illegible]此に[illegible]集の
[illegible]乃秋[illegible]大楠乃[illegible]くぬき
炭乃[illegible]炭[illegible]なりし[illegible]つる
八[illegible]也り[illegible]小子[illegible]知の[illegible]
[illegible]此志[illegible]婦[illegible]この[illegible]寫し
序[illegible]程て[illegible]勤[illegible]
折[illegible]點[illegible]家とつる境[illegible]八

わかしとゝらをほくむ

元禄七乃年夏同さつき初三乃日　素龍書

むめかゝにのつと日乃出る山路八　芭蕉

処〳〵に雉子乃啼たつ　野坡

家普請を春のてすきにとり付て　仝

上乃たよりにあかる米乃直　芭蕉

宵乃内はら〳〵とせし月の雲　仝

藪越はなすあきのさひしき　野坡

御頭へ菊もらはるゝめいわくさ　野坡

娘を堅う人にあはせぬ　芭蕉



奈良かよひおなしつらなる細基手　野坡

ことしは雨乃ふらぬ六月　芭蕉

預けたるみそとりにやる向河岸　野坡

ひたといひ出すお袋乃事　芭蕉

終宵尼の持病をおさへける　野坡

こんにやくはかりのこる名月　芭蕉

はつ雁に乗懸下地敷て見る　野坡

露を相手に居合ひとぬき　芭蕉

町衆乃つらりと酔て花乃陰　野坡

門て押るゝ壬生乃念仏　芭蕉

東風かせに糞のいきれを吹まはし　仝

たゝ居るまゝに肱をわつらふ　野坡

江戸の左右むかひの亭主登られて 芭蕉
こちにもいれとから臼をかす 野坡
方〱に十夜乃内のかね乃音 芭蕉
桐の木たかく月さゆる也 野坡
門しめてだまつて寝たる面白さ 芭蕉
ひろふた金で表かへする 野坡
はつ午に女房乃おやこ振舞て 芭蕉
又このはるも済ぬ牢人 野坡
法印乃湯治を送る花さかり 芭蕉
なハ手を下りて青麦の出来 野坡
どの家も東の方に窓をあけ 野坡
魚に喰あくはま乃雑炊 芭蕉



千とり啼一夜〱にさむうなり 野坡
未進乃高のはてぬ算用 芭蕉
隣へも知らせず嫁をつれて来て 野坡
屏風の陰にみゆる菓子盆 芭蕉

三吟

兼好も莚織けり花さかり 嵐雪
あさみや苣に雀鮨もる 利牛
片道は春の小坂のかたまりて 野坡
外をさつくりと圍ふ相撲場 嵐雪
細々と朝日こゝの宵乃月 利牛
子稲も此節米おきれ知る 野坡

泥染を長き流にのばすらん　嵐雪
あちこちすれば昼のかねうつ　利牛
隣へもしらせず嫁をつれて来て　野坡
てうりんしくも笑ゐるかわり　嵐雪
黒谷乃先ちハ畠讃岐　利牛
五百のうけを二度に済けり　野坡
綱ぬきに北いづれの浪ある茶碗へ　嵐雪
人のさかしぬ患思ふ事あり　利牛
新役乃鞭を下せ人自らみて　野坡
飯米中する芋をわか身　嵐雪
渋と両縁やとて秋の風　利牛
露ちみてハ又鼻一らく　野坡



名
本出乃ふらしお彭よ車ぬらて　嵐雪
抱揚る子の小役をとる　利牛
くりくしと河内乃苔抱送る盆　野坡
心みつ乃し箸乃せん多く　嵐雪
聟の見え娘の世をおしみ多り　利牛
てこし乃九れハ何も吸ひぬ　野坡
色紙の細よ伝ぞくをさするん　嵐雪
叶うい也いの小鳥にする　利牛
黍乃穂ハ跡て伝風に吹倒き　野坡
馬場乃喧嘩の後ま出月　嵐雪
来ハよくし思て人に在る　利牛
今年ハ庭や見くらちハ序にて　野坡

ウ賣手もうらうつてみんなたる文証　嵐雪
日よりしとゆふのあらかし　利牛
鎌倉の便きかせん道すがら　野坡
うしろ姿の志れぬ細引　嵐雪
杖ある母をすゝめさく糸乃子　利牛
まさらひ残る正月の餅　野坡

ふる川にまかりて
空豆乃花さきにけり麦の縁　孤屋
昼乃水鶏のはしる溝川　芭蕉
上張を通さぬほどの雨降て　岱水
そつとのぞけば酒乃最中　利牛

寝処に誰もねて居ぬ宵の月　芭蕉
どたりと塀乃ころぶ秋風　孤屋
きりぎりす薪乃下より鳴出して　利牛
晩の仕事乃工夫するなり　岱水
妹をよい所からかたづけて　孤屋
僧都のもとへまづ文をやる　芭蕉
風細う夜明がらすの啼わたり　岱水
家のながれもたれとしられず　利牛
能汁りん市よくなりて　芭蕉
菜の実菜をさけて賣出し　孤屋
この春八そうかる芸の縁し　利牛
よわりし柳欲今よ出しそて　岱水

宮乃紅吹えうしまる艀月　孤屋
ふとん丸げてものおもひ居る　芭蕉
名
不届な隣と中乃わるうなり　岱水
はつち坊主を上へあがらん　利牛
泣事のひそかに出来し浅ぢふに　芭蕉
置わすれたるかねを尋ぬる　孤屋
着のまゝにすくんでねれば汗をかき　利牛
客を送りて提る燭台　岱水
今のまに雪の厚さをさしてみる　孤屋
年貢すんだとほめられにけり　芭蕉
息災に祖父のしらがのめでたさよ　岱水
堪忍ならぬ七夕乃照り　利牛



名月のまに合せ度芋畑　芭蕉
すたすたいふて荷ふ落鮎　孤屋
ウ
このごろは宿の通りもうすらぎし　利牛
山乃根際乃鉦かすかなり　岱水
よこ雲にそよく風の吹出して　孤屋
晒乃上にひばり囀る　利牛
花見にと女子ばかりがつれ立て　芭蕉
余乃くさなしに菫たんぽゝ　岱水

芭蕉　孤屋　岱水　利牛
各九句

百韻

子ハ裸父ハてゝれで早苗舟　利牛
岸のいばらの真白さく　野坡
雨あがり珠数懸鳩の鳴出して　孤屋
与力町よりむかふ西かぜ　利牛
竿竹に茶色の紬たぐりかけ　野坡
一る小離れてゆめく人来る　孤屋
蓼乃丹干蕪乃茄汁かけとは　利牛
掃ても後のゝ檀ちるらし　野坡
ウ
おしめさせ井てより出る尽りほあり　孤屋
坊主衆あれとやかり仁平次　利牛
松坂や矢川へたいれて通り　野坡
吹かりし勝もつゞき岡乃坂　孤屋



十二三弁乃衣裳乃おそろしひ　利牛
本堂はしほまたとろく　野坡
日乃あたる方をあけても竹乃色　孤屋
只奇麗なは口すくなる　利牛
近江路乃うら若とゝ知て　野坡
天氣乃相よき三ケ月乃照　孤屋
鉢なからあまれておひしく漬　利牛
棟の実落る屋根くさるらし　野坡
帯賣乃庵を連主来なりの　孤屋
洗新作ら乃人若そろく　利牛
ほめらしと二つ負乃いひ出　野坡
ほうらし河への縁まつ蘇　孤屋

ない袖をゆりてみせたる物思ひ　利牛
舞羽の糸もよれつかれ侭　野坡
形しよ西国武士の荷のつゞら　孤屋
尚きのふより今日は大影　利牛
切蟻の喰へ爲しる椎たゝと　野坡
くゝり納豆を仕込廣庭　孤屋
瘧日をまぎらかしても待ころ　利牛
落てつけるる五結の重なき　野坡
つま迄あれの名を呼しはなり　孤屋
とちり乃香薬もさき井の本　利牛
ゆれの月楼り負来る古枝　野坡
すひきれ出れおまゝとつても　孤屋




ひつそりと盆は過たる浄土寺　利牛
戸てからみし北風なれや縁　野坡
伐透は桃と椿のすまあひて　孤屋
赤ひ小豆はあまりしき内　利牛
濱ちかハ宿の男に荷をとらえ　野坡
師走比丘尼乃颯乃まとはよ　孤屋
餘橋は明をと急し買ゝえて　利牛
天満の状を又忘れけり　野坡
廣袖をうへにひつかる船乃宿　孤屋
ひく紀ふしてよるる飯高　利牛
燃さる薪を尻ゑ指くへて　野坡
十日丞夜乃ふみまつしま侍　孤屋

内蔵にかきさはけ塚の縫たちり　利牛
弦打颪海雲とる浦の棹　孤屋
機嫌能かいこは庭に起かゝり　野坡
小豆まく小家乃秋の静し　利牛
楓燭に睡る足を出して　孤屋
繝乃緒うけを念入てかふ　野坡
麦畑の替地に渡る傍示杭　利牛
賣手もしらん相談の家　野坡
抱舞も子持はいれたかる　孤屋
又は肩の古着いしくに　利牛
妓まある人を上手に二番続　孤屋
夕雲夕んこのく薪しかうか　野坡



落雲乃こまかに初るを渡出し　利牛
一つくちなりに鶴乃雲雀　孤屋
跡付るに蕨引ちきる頬乃内　野坡
なめすまする高紅乃塚あひ　利牛
めを縫て無理に隠る腰の妾　孤屋
又たのみして莫懐たよりなく　野坡
かゝさされ市の己比目をまつる　利牛
入来る人に味方豆を割　孤屋
まちうのに赤鯵給乃新田川　野坡
出茶屋乃みゆる宿乃をはき　利牛
ほやくとんとはくらす雲ちられ　孤屋
みつ葉に餘まじる悪汁　野坡

寺乃内引越て居る桜哉　利牛
尻軽にする返事よくよく　孤屋
おちうくらくとし時乃名言　野坡
入舟つく月乃六月　利牛
拭立てお上の敷居ひかりける　孤屋
馬云つのる網うしつひ　野坡
（名）大かめ乃あくれ畑乃なのけて　利牛
何年菩提しまぬ村乃寺　孤屋
麦令まて同心乃あとを継　野坡
九九十日湿をわりらし　利牛
投出もなし立すしにかつさし　孤屋
足かし秦壁より僧は来る　野坡



里鄰れ作物引乃からつかく　利牛
やたらこのもの嫁の織りを　孤屋
まかりてる朔日ごまの精進者　野坡
うんちう果てる八ツおれ盆　利牛
丁寧に仏壇像乃口うつり　孤屋
新伝ら滌て土まよある篇　野坡
夕月に郡府の空をゆききくり　利牛
包て居る雛乃やさきくりの　孤屋
（名ウ）宮免を今年老風子欲すりで　野坡
もとや佐平もかすゝぬ押ころく　利牛
署府の詩書肩をとうのきこうり　孤屋
漫く月ぶりてこゆる峯坂　野坡

減もせぬ鍋屋の見世乃店おろし　利牛

門違ひ町乃桐後　孤屋

役者まで寺乃花の咲ちらく　野坡

三人ながらかはりしるし哉　桃子

# 春之部　歳旦

蓬莱に聞ばや伊勢乃初便　芭蕉

## 立春

あさ風やむしろかけたる小松　濁子

みちのく乃名よ関越く人の旅衣　杉風

きとや枚の丹波出来ぬ馬手をもて　京 去来

刀さし供もつれまさしと年乃暮　膳所 正秀



いそがしき中を雀乃かきさそふ海　大坂 酒堂

喰つみや木曽のにほひの檜物　岱水

捨いまきて門徒坊主れの礼　沾圃

月下に我乃洞や年先哉　孤屋

初乙新玉立てつまつぎや　利牛

若松や親のなきくるま房　野坡

## 梅

梅一本ゆるしまかせ次めうな　露沾

むめ咲や細乃桜木のよしそ見る　曲翠

むめがゝや竹の葉ずれそ何ぞ　支考

宵ならくるとて見ておく

むめが香や鶯乃朝日乃白ひ　伊賀 土芳

梅咲て湯殿乃山朋もゆかりあり　利牛
春みそ乃日を備ぬる梅乃花　游刀
みなくても咲るれや梅乃花　野坡
紅梅を照すのれる妻戸の卯　杉風
封かてともの七くさ千代をかさねて
とんとうと譲(?)も白へる若菜かな　其角
七くさや跡にうかるゝ切刻(?)　野坡
うちむれて若菜摘ゆく腰ゆかし　仙杖
はつ月乃大乃をんれ　玄来
睦月一日のつもりかね
大からや陳乃出てく睦月　倣 丈草
おめてたくさかさんぬる旅衣(?)　仙花



深川乃草庵にて

長閑さや寒の残りも三ケ一　利牛
十五日立や睦月の古手賣　大坂 之道
猫乃恋初手から鳴て哀也　野坡
ねこの子のくんづほぐれつ胡蝶哉　其角

鶯

うくひすにほうと息する朝哉　嵐雪
鶯に薬をしへん聲の文　千角
うくひすのあちに起り巣立の声　桃隣
うくひすや門はたまたま豆腐賣　野坡
鶯に一声も念を入にけり　利牛

柳

こねりをへらして植し柳哉　湖夷

陽まごし月のおぼろん柳かな　素龍

五人ぶちとりてしだるゝ柳かな　野坡

せきれいの尾ハつん出さる柳かな　一風

町ならへ出てゐる宿の柳かな　利牛

傘に押わけみたる柳かな　芭蕉

椿

土なから鑵にちり込椿かな　孤屋

枝若く伐られ身なるを椿かな　湖春

急乃くまてうつほむ椿かな　曲翠

猫にかまれみせぬ笠つばき　嵐雪

ゑるのねも猫の生縁の落椿　支考



なまよ掃除してくへる椿数れる　野坡

花

こゝの花つまやまりゆりしまへく

幕打はなりの吉ふこゝの跡へくへく

かゝりてくかゝれ松なけれど
よのまて

四つてきおそろちぬ花のみんなに　芭蕉

あつうしや内て花見のゑ悔しら　杉風

うかくと来てくハ宿んの宿まで花かれに　丈艸

何もしのかげの陰まで花見る行くて

中下もうれあ熊乃宿まへに　素龍

菜きるや向さのしらを宗傾をせ　去来

猫めしの湯を冷膝やこ庭の花　孤屋

あらそふ雀の青乃たゝきかな　荊口
たふれても柳のくらいきる花らんかな　斜嶺
柳の髪ゆらりの影や花の中　北枝
牡丹まく人もやさしき八さのくら　湖春
あまもりと花に五板のさくらかな　其角
華いまも毛虫にならし花桜　光堂
やまさくらちるや小川の水車　大津あま 智月
老僧も髪は雲かつきくる茶まんかな　大坂 之道
緑子の母を留て摘ぬる蓬かな　沾市
山桜小川飛こしおなこかな　越前稲井 普全
昆布だしや花まのつく摩裏坊　利牛
おちつきは魚やまなやや桜かな　仝

折々くる桜てらくや庵所　孤屋
ゆふ〱しあさふ日むくて菜人かな　野坡
倉乃舟みなあつまるや山さくら　仝

上巳

学とられ川乃なかるゝ汐干かな　沾徳
昼舟にのり家ゐやこゝの桃の花　桃隣
うつくしきの袖をいつれぬ家の雛　其角
雛乃さめん餅をとかもひなかな　この 如行
日半潮をとてくれて前や桃の宿　野坡
麻の経千騎て麻のの花　利牛
菱堀やこるの貝かくもの花　孤屋
青柳乃泥にしたるゝ汐干かな　芭蕉
泥しだるゝ

濱つかさ今年こそ小あゆ小 十月廿日 嵯峨 芭蕉

まつ白や膾の菜つみ羽根の滴 芭蕉

炭竈る一しの葉や二三本 子珊

ほろろしところみ枝門のつまるかな 伊賀 怒誰

冬の月やけの陽や風乃末 猿雖

寒さむきさむきまの葉乃麦乃山嵐哉 仙華

旅行

涼しさや場より内もすゝしれ 野坡

此筆かくは半天は孤屋旅立

すゝめまれ露月まてみ送りて

雲の海とこまで行も桜かな 野坡

あさこ跡さし夜そらりふ月夜かな 利牛



夏之部発句

首夏

隠かを乃雪隠見えにけり 嵐雪

衣かへ十日はやくも思ひけり 野坡

綿をぬく旅ねはせはし衣更 丸白

幾よりやれしき綿やきれかへ 雪芝

米のあしとけさよ時の着かへ 子珊

扇屋の暖簾白し衣かへ 利牛

うの花

卯花やくらき柳の及ごし 芭蕉

うの花の絶間たゝかん闇の門 去来

旅り牛

うの花に芦毛の馬の夜明かな　許六

卯の花に扣ありくやかつみ　支考

鵜しらん

棹の歌すゞしう涼しめづらしや　嵐雪

舩にも池に蓮ある宿屋かな　洒堂

うくひすや竹の子藪に老を鳴　芭蕉

郭公

宵まてに二階にねたるほとゝぎす　桃隣

ほとゝぎす一二の橋の夜明かな　其角

竹騒と月まちせんとほとゝぎす　嵐雪

挑灯の元に淀なしほとゝぎす　杉風

木かくれて茶摘も聞や郭公　芭蕉



まだ雲や再来しやる子規　素堂

時鳥啼し風が雨となる　利牛

子規顔の出されぬ格子かな　野坡

麦

柳さへ麦臭いやし桃より　（その）荊口

麦の穂とたちまぎるゝや筑波山　千川

麦秋の田植や生れ蛍とぶ　許六

嶋乃艇りを川さきまて送て

刈てみし麦乃白ひや宿の月　利牛

おなし所

麦畑や出ぬけても猶麦の中　野坡

おなしこゝろを

浦風やむらがる蠅のはなれぎは　岱水

端午

五月雨や傘に付る小人形　其角

さゝ粽くみわけつれ風の色　大坂 油堂

五日よくくらすまみのあやめに　桃隣

文もなく口上もなし粽五把　嵐雪

みをかやを菖乃冑を申差　仙花

帷子のまだぬき節の袷かな　素龍

夏暑

並松をみかけて町のあつさ哉　卧高

桔梗塞て皃まじりたるあつさ哉　斜嶺

二三畝銭を帰るもあつさ哉　華 魯町

そけ山の力及ばぬあつさ哉　猿雖

するが地や花橘も茶の匂ひ　芭蕉

此句は島田よりの便也

五月雨

はされやとび込魚る丸木橋　素堂

五月雨の色やよど川大和川　桃隣

さみだれに鮒をにぎれる子供哉　野坡

五月雨や桑の葉守る蓍薇　嵐蘭

この句を桃隣より申こして

水内有や新もやくしもの本　岱水

涼

川中の根木によりそふ涼哉　芭蕉

月影よりこく夜歩やきぶ乃光了　うち申

涼しさよ蝶よまさる紅」か枝　夘七

行燈をおりくこゝろすしとゞ　探芝

涼風をすくれて涼し又倦れ哉　智月

すゞしさを志れし柄杓乃雫かな　兀峯

すゞしさや浮洲の上れけくらくへ　玄来

さよしろ美女の家さ夜は乃かゞり　母坡

三ヶ月に涼りてすむ哉かな　素半

題しらず

橋や家机乃ありところ　杉風

麦刈むくや破芭蕉すゞしき涼之　正秀

世の中や團貢畠の行れ哉　里東



早乙女よけふくらべる葉飯か　嵐雪

未考続かく

山吹も巴も出る田植かれ　許六

ひるがほや高津さしぬ花の良　智月

なくなく花くはすさめぬまくらみ　小観

咲かぬめをさかさせよえすの堂　乙州

るもの兩年てはるかりとか　丈艸

笑しるりのくやく夢　仙花

一いきれ蝶もつつくかる家外　楚舟

ありふる蝉かし涼し東の南　この残香

橋の首まりとしの茶子か午　井ち酉有

団賣ゝ住町なりあくさゞかれ　野爪

けふこふハ鶯の栖や雲の峯　祐甫

一枚にすけるハ竹のわたかな　仙苑

竹乃子や児の歯くき乃うつくしき　嵐雪

さかつき人 僕ハ酒をたしむるがごとく
我ハそのぬしにて深せしむ志られある会に
それをそくこゝろあしきはかりごと
名のあるかぎりさえ出てあらせられ
くれた汗をかきつゝ

涼しさは名のつくあつさ哉　利牛

十抱ありしを夏のうちあのことをなかば出て

行雲とかさ みのや 夏座敷　雅誠



## 穐之部

### 名月

秋のあはれいはれかくの身しり
月を始て竹の寿を忘る事

名月や天つみても宿ぬ秋一よき　渉英

名月や探元まりん泰の虚　玄来

家買てことし見初る月夜哉　荷兮

名月や池の水ふれ葉末の端　西堂

松陰や生え揚平ハ乃月見　黒東

りうちう乃橋のひくさより今日の月　利牛

あはこもの高きもなしはの月　其角

むさしの伴秋のゝくてしあそ見る

望峯ノ不盡筑波を

月や不二見ゆるとする町　杏莊

七夕

笹のかに恋付て星ほしみゆく　其角

天の川あひえ立る衣やの縁　孤屋

七夕やふりかかる事天川　嵐雪

盂蘭盆

きりきりはかかの影やむまつり　洒堂

涌きいさき手を砕く盆の月　江戸 李由

盆の月ねられぬ門をたたきけり　野坡

胡鳥

閃関

胡鳥や鳴きを鐘静かに門の垣　芭蕉

秋鳥や白葎出てゆく垣の垣　利合



てしまと秋見えたる柳かな　濯春

秋虫

手にとれえ散るハらてうきみを　大膳 敲月

臨りふ人のときれやきりぎりす　大中

蝙蝠ありふく庭をとめるこれ　さく 於有

こうろきや笑て退て鐘の上　孤屋

雁

友雁乃帰をつ人と之ゆく雁かな　車来

人のりとあまよりて

雁のふむ紙や硯の粥恒ぬ　かた 素彩

旅かりのとま

逃げ延や一りょうひよ立つ雁の長　土芳

草花

之波乃萩やふみよる秋の花　桃隣

花すゝきまねくちからや村まはり　世堂

河原乃萩や刈られし稲の端　猿雛

芦乃穂や白根揚ゞ蔵ごもり
　あまたはまさく　夫中

芦乃穂に笛ふく川ふや宮の径　交来

山中の葦萩をみて
葦萩や鼻の先なる分なきさ　甚暮

園菊

菊畑おくある青れくゝり代　杉風

摘菊も多まに咲けれ九日の飛　桃隣



秋植物

柳のあるなとそまくものあしところ　利牛

蕎麦や公事あつかひ蟹の甲　祐甫

秋風や茄子乃殻のあつかく　木白

箕まで干く窓ほのみて綿の桃　孤屋

ちうをしの名を南蛮人よりきゝしハ
これも海南さんまくひさしくたり人や
未詳なりつき天のそきさうして尺八ハ寺なり
あとさきハそのうかさちをてのめる人て乃
りくあるひそ什しる寺なへし　やさし
名月八山ちむかれ対乃つくなれハ
天資自然の現さまりし憎むへかられり

塵をさるや石基よのせられさく竹稼
のそしのりさまある八上にし氏住金とされハ
すりあちのされてことめけ乃つくえ工あけれて
手乃そられ二階のつま抱かりのひろけんと
よのめる事とあやらくみ待るを基臣の
えう身き多くひろりハされもく担りなと大なさ八
久う紙つり鞍のすそらあよりしつれ
てひん本楷のくちをつまをみさ多まとあり
参ら云茶乃とき事とうれ出されなく八
庭之豆鼓乃比紅葉乃色をみまるを
其名の頂上とせらるく八心へとある人
此中りくての陰さりしみち乃ならりの



小亭まことに一妻られて南んちろまくに
ひとつみのりしを存せしてみ門りとなる
いやしめらるべき子もおいられまうしいま公の
人くも此世をとさりつれそいふく重をも
とのむへなしきめもみきへなくとと

小序をまりの上

石基を縁かけ根ときや磨なし　世破
見しられ
お撲取あらし鳩や秋乃かくれき　嵐宮
あら風呂れ下や宰山立寺の経　交草
礎ひとりよき波拍乃白ひろ紙　洒童
秋のくれいよくうくあるもの　菊ら

茸狩や美蕈も見ハ嫌ひ良　利合

夕良乃汁ハ秋しら歌なし哉　支考

くる秋は風ありてもあつかりり　小枝

新風に嬉やあふあき池の上　傍 信之

庵下乃竹細くし月乃雲　其角

冬之部

初冬

凩や沖よりさむき山のきれ　其角

市中や木の葉も吹る庵の墨　桃隣

木枯乃磯に乞食乃跡さらかな　芭蕉

椋鳥や荻伏せる冬の月　支梁

旅の夢乃きれきれや小松原　斜嵐



刈萱や枯乃裏に鳴雀かな　桐実

凩や翁子として小家かな　松香

初霜や猫乃毛も立つ居所　楚舟

凩や瞬(マタヽキ)きけき猫乃面　八桑

西家山に淋しく

木枯れ根にまとふ付桂皮かな　桃隣

篝月に一束乃萩殿乃さむさかな　游刀

時雨

芋畑乃後へらしかり初時雨　荊口

見えかくり沖の時雨れりところ　丈艸

芭蕉翁をわくの青原まきて

ましぬかれと ゆりの初時雨よ宮の居　斜嵐

まゆとしかれなくしも九寺かな　許六

蕪ねのころ
小春日とみのりの卸た挽やらぬ　野坡

大根引といふ事を
鞍壺に小坊主乗るや大根引　芭蕉
沛をとられて荒て大根引　野坡
神送荒るゝ雪の大大根　洒堂

はむさきをつまむすて
人数の鼻をとらるゝさむさかな　野坡
このほそき先榛もしぼむさむさかな　木蜂
蕎麦抑も吸物きさきさかな　利牛

是ほとも寒しなりて秋の宿　我眉
奥底や蕊ちら上る冬の月　里東
木の二葉ちらつく川のほとりを他国よりの船乃よしみるゝさみだく
今宵こそ出し岁

雪
さつ雪にとりを敷てかゝりけり　野坡
初雪のつもるや山の白髪かな　利牛
越川も嫁の山崩の芝の上　貫山
雪の日は庵借そ鷦鷯　信〻
雪乃日やふすまかふりて寝る一夜
冬の坎飯乃寺かな　猿雖

杉のしみれ雪打撒し秋の露　　文考
朱北鞍や佐せくわさりの雪晴詣　　如枝
そらつきや先る所から消もむる　　許六
嵐やまれ横町さくる雪しぐれ　　渉夕
海山乃名にし信夫なる雪かな　　乙州
江の舟や曲突に干す雪の驚
歟ふる　　素龍
思ひきや絢にまれし迄杖が舟　　羽黒山人 呂丸
こぼる菊や杉糠のよる臼の端　　芭蕉
禅門乃草鞋袋に投てる十夜哉　　許六
ゆやら被乃盆ねてる村しらん　　智月
白魚のなかろき白ひや杉の箸　　之道



榾の火やあかつき方の五六人　　丈艸
庚申やこよひ火燵のある作る　　珍香
海上の縁起すんでさく神楽　　其角
海く嶺ぶ数や雲ふ波の音
すゞなぎき　　仝
螺ふきを己が棚つる大工かな　　芭蕉
㹂耕せずしてくらふ田代哉　　万平
餅つきや元服さする草履とり　　野坡
山川のうねりに如意涼し　　嵐雪
侍や氷をすゝる[illegible]　　智月
紫菊
そのそれを文にうつし見しり事　　杉風

そろそろぬ年へも行り年の暮　李由

ふしみせて鴬一羽としの暮　智月

網かさ乃けさくしさよ年の暮　孤屋

うしの咏をたえらしら依振和書　猿鉾

年乃くれ分ふくさく誹流ゐ　卅岐

芭蕉より乃みやけれ乃すゝ

いくたひもとしをこえてまよ

爪をくく心やさしや年くれり　嘉露

行年よ京へとよろこぶ旅ひとり　泖尖

## 誹諧秋之部

秋乃夜尾上の形よ離れより　其角

おられても一羽海ゆるき鶴　孤屋

影象ほ月脩ぬる良ゆくゝ　仝

身の隠るし日白銀内門　其角

起文ゝ子乃火桶も落ちきえ　仝

つらひ孫やを丸きころそ候　孤屋

下京に守治乃美異嵐さつれそ　仝

諸生乃衆に派　蓑ハおかりしむ　其角

足雅おそすかしそ揺る人かな　孤屋

息吹こへ全く霊氷乃針　其角

田乃畔まる苗把く撥る雲　孤屋

反省のそきむ浪海ものしれ　其角

行燈乃引出しさかすはした銭　孤屋

顔に物きてうたゝね乃月　甚角

鈴縄に鮭乃さけ目ハひらつきて　孤屋

屠れ下しや浅茅のほそく　甚角

雪さく乃楊漆籠乃春のみち　孤屋

むかしの子あり志のたゝ世て置　甚角

いさゝか絵奈き金おつらひ也　仝

裏乃綿乃あたらしき内　孤屋

夜草はひとよさうれて売れり　甚角

あかきとめへん小僧らやくう孔　孤屋

手のさ寒森乃根も荒ちので　甚角

芋とさ奈うつるゝ風呂をたてん　孤屋



君こねたこりれ次第乃名所なの　甚角

釈と隠との行衛つる證拠　孤屋

幸済く雀のくりる秋乃くれ　甚角

水より冷ぬ月乃雲行キ　孤屋

紙帳しく裾く来より雨の残　甚角

上　深雲ふしよ張く押く星　孤屋

椋　小栗清出行灯よりて露むり　甚角

さてさうくし後帯乃かね　孤屋

孤屋旅立の時集として発句のしけるとは

冷ゆる日赤満にて冷ゆしね

甚角　孤屋　各十八句

天野氏興行

道くだり拾ひあつめて案山子かな　桃隣

どんどと水の落る秋風　野坡

入月に夜はほんのりと打明て　利牛

塀の外まで桐のひろがる　桃隣

銅壺よりなまぬる汲てつかふ也　野坡

つよふ降る雨乃ついでもし　利牛

丸の内気へらぬふんまへる鮭　桃隣

近くに住れと米店手まさぬ　野坡

まつりごと常住ねがはし　利牛

いつよりさむい十月乃けしき　桃隣

壺雨乃小松萬鰯まんきてって　野坡

分てあまかとし嫁乃仕合　利牛

そんなりと棚に降るあられん　桃隣

法おとうりける夕月　野坡

附あし見物きこゆる豆の内　利牛

昨かうつき身きらくあつまし　桃隣

人の知合ねて楽をなきちら　野坡

もさや酒もすめる雨山　利牛

より平地棧に小桶入て置て　桃隣

むかひ乃ちってとられもつま近　野坡

罷過て菜て身辨てすなく　利牛

ゆるなしきう燕まつつく　桃隣

此比の葉をきとし秋のなか　野坡

杉の木末あかり内にうつくし　利牛
門しめし老の御しのあらくて　桃隣
さそはれて又世新鍛冶に待　野坡
よいやられ家のは店をかしておる　利牛
ちやうしんとそれをおそめの商ひ　桃隣
帷子も二肩ならぬ暑さにて　野坡
京は惣別家に念入　利牛
名
焼物に組合たる富田鮓　桃隣
傳を嗜んで今も稽古ゐる　利牛
繁昌に雪踏とかするも出来て　野坡
先沖まではみゆる入舟　桃隣
内でより葉の香くても春の絵　利牛



ちりきも風のかゝぬ花さかり　野坡

神無月廿日ふか川にて即興

振賣の雁あはれ也ゑびす講　芭蕉
降てはやすみ時雨する軒　野坡
番匠が樫の小節を引かねて　孤屋
片はげ山に月をみるかな　利牛
好物乃餅を絶さぬあきの風　野坡
割木乃安き國乃露霜　芭蕉
網乃者近づき舟に聲かけて　利牛
星さへ見えず二十八日　孤屋
ひだるきは殊軍乃大事也　芭蕉

淡氣乃雪に雑談もせぬ　野坡
明しらむ籠挑灯を吹けして　孤屋
肩癖にはる湯屋の膏薬　利牛
上をきの干菜刻むもうはの空　野坡
馬に出ぬ日は内で恋する　芭蕉
絈買の七つさがりを音づれて　利牛
塀に門ある五十石取　孤屋
此嶋の餓鬼も手を摺月と花　芭蕉
砂に暖みのうつる青草　野坡
新畠の糞もおちつく雪の上　孤屋
吹とられたる笠とりに行　利牛
川越の帯しの水をあぶながり　野坡
平地乃寺のうすき藪垣　芭蕉
干物を日向乃方へいざらせて　利牛
塩出す鴨の苞ほどくなり　孤屋
算用に浮世を立る京ずまひ　芭蕉
又沙汰なしにむすめ産(ヨロコブ)　野坡
こそ〳〵と太晦日も四つの鐘　孤屋
無筆のこのむ状乃跡さき　利牛
中よくて傍輩合の借りいる　野坡
壁をたゝきて寝せぬ夕月　芭蕉
風やみて秋乃鴎の尻さかり　利牛
鯉の鳴子乃綱をひかゆる　孤屋
ちらほらと米の揚場の行戻り　芭蕉

月白きめぐりのつれの縁はしく　野坡
こゝろうも香乃そ内に使はる　孤屋
籠炭れちりをそらず火鉢　利牛

芭蕉　野坡　孤屋
利牛　各九句

雪の松おれ口みれば尚寒し　杉風
日の出るまへの赤き冬空　孤屋
下肴を一舟浜に買置て　芭蕉
あつらへきりし大名の供　子珊
身にあたる風もふハりと花月夜　桃隣
粟をとられてひろき畠地　利牛

熊火口代説きゝれる秋の水　岱水
気ぬらしらべて鍵かけ直る　野坡
二三度は蔵なりし婦門の裾　子珊
ゐる乃蕗抱のさりける干もの　佳圃
竹の皮雪踏に留て友はきて　石菊
稲になりめさん雨乃てらし　杉風
めかお荊れ一人も見えぬ浦の秋　野坡
めつきすれ風のいきする宝色　利合
干あし乃負をかさらして旅大工　依々
背中への手る男とふ中々　桃隣
家乱しるれきふつて上に乾きて　子珊
川のくもくに小鮎いしする　石菊

鈴らさ雲たれくらき僧のもき絵にかける　杉風
祭りの人へ丸れて山へ入り　岱水
揃ひあひ身をやつしたる歌うたう　孤屋
紅ゐ葉過て八朔の寒き雑炊日　芦良
緑子を揃へて給へそうり返　桃隣
けさはしけりもさく萩代の花　依々
富士おく雪あるはバとしてきよし　沾圃
ころり散り大き鳥をとりてやる　子珊
又けさも佛の食を坊と鳴　利牛
扱てうりしてし買ひとがぬ　杉風
大坂此人にてれかるぬめの月　利合
酒をとまれ祖母の神子へ　野坡

よき夢みる此前の寝めぬけふ　子珊
次代かけて斯てつまむかへる戸　利牛
好み身すうらかく見れハ切々冷ゆ　芦良
七つのうゆから鷄の峰に里見　杉風
秋の白ゆふ雲に雨のゝ降出しく　桃隣
男まじりに蓬そ刈ゆる　岱水

| | | |
|---|---|---|
| 杉風 五 | 野坡 三 | 孤屋 二 |
| 沾圃 二 | 芭蕉 一 | 石菊 二 |
| 子珊 五 | 利合 二 | 桃隣 四 |
| 依々 二 | 利牛 三 | 芦良 二 |
| 岱水 三 | | |

撰者芭蕉門人

志太氏　野坡

小泉氏　孤屋

池田氏　利牛

阿羅野

尾陽蓬左橿木堂主人荷兮子集を編て名をば
あら野といふ何ゆへに此名有ることをしらず予はるかに
おもひやるにひとゝせ此郷に旅寝せしおり〳〵の云捨
あつめて冬の日といふ其日かげ相続て春の日また
世にかゝやかす げにや衣更着やよひの空のけしき
柳桜の錦を争ひててふ鳥のおのがさま〴〵なる風情
につきて いさゝかこの実をそこなふものもあればにや
いといふかひなからんかれし此何がさもれふの
て雛をいはひもつかれ雲雀大空をかけりなれて
無名の翁にきはまりなれ玄之のうち志ある人にもと此野
の原の野守とはなるべし

元禄二年弥生　芭蕉桃青

花三十句

よしのにて

これは〳〵とばかり花の芳野山　貞室

我まゝといはする花のあるじ哉　路通

花白雲さけあふく其れの林かな　信徳

なか〳〵に山とこゝろまへてちるさくら　晨風

蒼淋し花の陰の鬼瓦　友五

山里は貧さゝの古めるさくら哉　尚白

何ごとぞ花みる人の長刀　去来

みよ乃雲ともしらて花と酒しまひ　野水

さくら乃ちりくるをしらんかな　亀洞

下の下は客といはれん花の宿　越人

花の山常折くる枝もなし　一井

見ありくやまたちらぬ花の隈　津嶋 俊似

見飽るのいろはちらすな花の咲　嵐潭

ちる花を酒ぬる人もなし　舟泉

冷汁は散かゝりけり花の陰　胡及

さく花に後ゝ傘をすほめけり　長虹

竹舟の花咲かゝり春乃雨　津嶋 卜枝

おもしろき姿なりて近よる花の枝　路歩

連よりや後れて見ゆる花の時　荷兮

花猿の顔よりさげてゆるなら八　傘下

おしくもちるや風車売花乃しらさ　蕉芝

花よりさきて出てくる人かな　さつ

山あひの花と夕日しみ出しけり　心苗

行りくや霞をおして鈍の雲　鉄人

まつあるやたちたまれ捨すする袂　野水

猫あそく交遊ひにちる花やなま　冬松

花をもてこりくる昔みる尾上かな　冬文

蕎麦してたまはりんは鞍とらせ　荷兮

酒のみゐたる人の繪に

月花もなくて酒のむひとり哉　芭蕉

あるる人の山家にいたりて

櫨の木はそれとよからぬすゞみ哉　仝

杜宇二十句

ほとゝぎすを題とせしまゝ感じて蕉翁の筆は

古き庵比夏夜明ても郭公　季吟

月の夜を来るまで待ぬ岸ちかし　素堂

ほとゝぎす中にも空より蜀魄　洞雲

蝙蝠のひるも出しやほとゝぎす　我人

ねひし子の目さます也時鳥　松下

初や先身のつく世話の郭公　竜五

ほとゝぎすいかにききゝ世の広き　柳風

ある人のもとにて寝覚せしとのなれて

ほとゝぎすそこらも多き鳥になれ　嵐雪

暁き宿のほとりやほとゝぎす　蓼枯

蝸牛鼻もそはそはや時鳥　一髪

三声ほとゝぎすの松の郭公　同

渡りて

ほとゝぎす十夕も来ぬ鳴く舟哉　風泉

嬉しさや森のしぬ先のほとゝぎす　杏雨

あかつきや今聞く郭公　傘下

ろくしからや力を傾きかしほとゝぎす　同

るしくなき寺あひるの郭公　鈍可

先君の消息を残られしと吟られけん　大臣

哥詠ミよふり人の郭公　智月

ふるさとくらて聞かぬ郭公　李桃

うつろひて実のなくて花ときえん　子山

月　三十句

かるくと笹のうへ行月夜哉　梅舌

それなしも月見る中の福うれし　湍水

月ひとつそひとつかちの今宵かな　一茗

名乃月よ影もたしれ花おかり　越人

冬さゝにお照むく月夜かな　昌碧

風わた梨の雪かな一声や月の影　市柳（付山まま）

桜しらぬ花にて添る月夜かな　一髪

まてまてもそうなきて月乃出給へ　長江

涼まれて硯抱く月見る夕べ　任他

一ツ屋や家を見るなかの月　亀洞

花はく松明るき程もなかりけり　鉄入

名月や今宵は十二日をかなの引　文鱗

名月やさらは渚も見て浮ぶ舟　昌碧

めぐらや出してあるく草の中　傘下

名月や鼓の拍子太乃てまし　二水

見るかのとうてて人の月見かな　世舟

名月乃名はさらけれ

むかしと月を見る日も火ゝ嫁し　荷兮

いつの月も旅と思ふて寝にし　仝

名月や海も杉見れ山見れ　玄寮

名月や下戸と上戸のむつまじき　胡及

めいつゝはあなききゝぬ林家　納言

宵よりし樽ならひしや月の影　一髪

十三夜

影ぬさ衣まとぬ砧見る月夜かな　松風

朔日

暮いかに月の氣もなし海の果　荷兮

二日

見る人もたしなき月の夕かな　仝

三日

何事の見たてにも似ず三かの月　芭蕉

四日

夕月夜あんどんなしてまちかねむ　卜枝

五日

何日も人さゑ見えぬや宵の月　伊勢　鶴泉

六日

銀川見るほとに澄や月かくれ　墨濤　露芦

七日

續かんとおもひて帰る月夜かな　岐阜　一髪

雪二十句

大津にて

雪の日や船頭殿の顔の色　其角

いさゆかむ雪見にころぶ所まで　芭蕉

竹の雪落て夜るなく雀かな　塵交

かさなるや雪のある山只の山　京　加生

車屋雪の来ぬ日もさびしさよ　加賀　小春

いつまでとつゞくる凩と啼ひばり　越人
はつあられ夕暮ぬつまれ菴かな　之幸
ものゝけの婦しぬり声れ一つかな　松芳
くしきに秋る物語見てより雪の隈　二水
雪落しくる屋まていつる光かな　亀仙
秋の雲打しきまぬかれ枝折れん　岐阜 徐風
ゆさはれ月や八筋斗打そくしく　碧汀
梅か香やおしつきる手の青簾之　傘下
雪の江の大舟より八小舟への船　芳川
雪の軒から鮭てくる声るし　冬文
雪の暮樵すやかしや痩るの色　桂夕
ちらしや清香かふ酒強飯　来分

そら明雪や先人草履ほて壊され　路通
はつし拂し雪れ見ぬまへ不　飛水
舟のけていくつの焼ものさたい宮　芳川

歳旦

二月ふるぬり八せし東の紀にまよ　芭蕉
あれ人のまからもかしし茹ま　釈古梵
ひきのや先千年乃つゝく縄　風絵
松かさり伊勢の家賞人をはし　其角
うぬの昼連歌にあしきお有　文鱗
有雪のあ先ふも志しし門の松　去来
かさりなふなりして年する橋かな　一日
ええらやゆく方られしを逢さかる　路通

元日ハ明すましたるかすミ哉　加賀 一笑

歯固に梅の花かむ白ひかな　大坂 如行

梅さく社まうてゝ拝しの宮　岐阜 落梧

ゑのころをうちかけて見よ串柿　亀洞

伊勢浦や御木川休む殿の奥　同

まふれ代に谷をつゝてつむ御代椿　昌碧

去年の実ちいさくなりし串柿　久廣

小柑子霞やひろふむまつのうち　舟泉

とし男神楽をあるひかゝり　同

山法師よろし白まし御寵りかれ　重五

松かさし引馬待つ年初ゑ　釣雪

月花の初に琵琶の春をうり家　荃

遠く来て子なき宿たり万歳楽　一井

うし白もちをもる弥の尾張　胡及

ゑれかゑむ見や新玉の年の海　老虹

とれく紀く縄ねしれとく柳かな　嵐弾

さそ雛やならいの面をいさ承る　同

蓬莱や舟乃頭のこえおくらして　瑞水

佛にも神にもまうしと給の年実　京 亡吹

のしゑやとらしの息そいこのまりん　朴什

ろきろもれとたろそひゑかんたゝしかる　冬文

正月の魚のかしらや炭さかな　傘下

人さゝれき数しるかしの国の神　冬松

あいくゑ松葉き門もわりしゑや　柳風

大服八十年の寿の白かな　防川
豊なる鶯のまかれ年ひとこ　大山 昌揚
傘に嶌朶かゝれる元日朝　夕ん
神すゝまく松の葉ちらきぬる春　梅舌
定めてしつんむ雲やうつる大如くく　田水
曙を鶯の初やなくらくら　仝
まつ真にはえとれ若く覚魚く　越人
初鳥や須名の橋のとれる海　仝
白川や志津清階よきみの麦望　蕉笠
名家の木やもを隣に明にたき　同
己のよしやむらしのまれ初風つゝ家　同
家を喜見かえる立川毛かな　信 般齋

家筥式の高砂も来るやら飲の真人　貞室

初夷

若菜つむ沼を木を剝畑かな　越人
精出して摘もしらぬや若菜かな　冊宍
七草をきとられさうて渡子かな　津島 俊似
女郎花露にぬれての若菜かな　松坂 小春
御湯く後の初はき残菜かな　蕉維
昔うしもの乙してならぬ若菜かな　岐阜 素秋
不動くつれえる梅折しんで　去寮
瘡痛く折ふくらし梅乃花　路井
む鬼のむもの氣まけぬかし去　越人
数見え忘れもとくまれら梅のむ　虎椙

梅折てあらそひ見せよ丹冊に　一髪
星もなきむ矢乃手へハ入れ払ひしき　冬松
みのむしも忘れ凍る梅のさかり哉　益笠
絹代武蔵の鳥に逆らて
古梅の木に手をやる空も梅の花　芭蕉
うぐひすの鳴そこ迄ゐる山風の声　長良　若風
鶯に鳴や餌ひろふ戸も今も　玄来
あさ日の中や鶯しめるさ頃の彩　伊賀　一朗
鶯まちいさき莢も折もまし　伊賀　一笑
うぐひすも声よ眼さる戸中に　日　市柝
鶯もなしこもまたや影に姿　日　黄又
うぐひすも戻る汲之に足河無作　梅古



悦きよ手折今さきりの空ら那　秋水
招くく梅乃うつしぬ庭ら那　慶支
帆人の蓑をとらみ丹ぬ象の紐　冬文
かれ芝や又さけ流乃二寸　芭蕉
又淀るや馬め限九をかしく　路通
炭焼乃見ゆるにをかしくるや　蕉
嬉しさを語るかしきやまめし穀　嵐雪
さし木
挿木
つきあらし見のぬきくるさし木哉　舟泉
つよの下ろしらのさる絶種に　傘下
樵

曉乃鶏にあつる滞くれうか　兼兮

同

藪添く情氣のつゐつくはな　卜枝

春雨

あるゝ日をいせ参ㄖも一つくともかな　潴水

同

春の雨青むもと降てここと　亀淳

西尾旅

とんや嶋さの風つまちるる白尾かな　歌之

雄犬井に羨ゑ如くゐ霞ゝつれ　高生

立即も一夜草も見ゝゐ内海哉　十寒 亀助

すつくと親子搞る沾くし　京泉



すゝしさつまやつまいゆや去ぬ　其角

まゝくと安楽寺の堂の土手　遊堂

去様やよるとくてゐるつくくし　指車

川舟や里をのつくつなつくし　冬文

はらくし法帝はゐまれる出て柳　香江

葉亭北之人池中鷺を鷺見えぬしと　畳京に題

池に飛ぶし雁の衣着初ふ柳法　素堂

風の吹方を後先柳こう挪　歌水

何まも揉しても柳汁　越人

さし柳さし出あるも折りしろし　一笑

足をうりをや蚊もぬる柳汁　小春

すゝれく柳ハ風まかせつよし　一笑

とりつきて筏をとゞむるやなぎ哉　呂谷
さくらにも髪のゆかぬ柳かな　杏雨
みしかくて堤のつゞく柳かな　此橋
吹風に斗のさゝけしく柳哉　杏雨
吹風に露をさよするやなぎ哉　松芳
うせもせぬ日をわかりの柳哉　校遊
いそかしき世渡を知らぬ柳哉　蘭可
蝙蝠やみさゞめの柳かな　日
青柳よりもしらて酒の車哉　素秋
引いきよ流へゆるゝ柳かな　略非
葉なき花をさかせる植木哉　生林

仲春

麦の葉は菜の花うつる山風哉　不梅
菜の花や松葉の古手代あらしかな　長虹
なの花のうへ飛ならつる日影哉　傘下
菜の花の暁うちみどれなる哉　清淵
うこくとも見えて畑の蕪哉　玄来
万葉を仕舞かえてる菜田哉　冒頭
つくさやおもくらてさらし哉　趣人
廣き庭に一本植しさくらし哉　矢州
そさつし八重をさくら咲よりり　除風
手折とく惜し気折かし桜哉　一橋
うしろよりうへしれぬ世の桜かな　季松
はるのくさ山やくれての松さなかり　一髪

そよ風よちらしかゝるかゝる胡蝶かな　野水
あふのさに鷹くらひ行巣の芝張　除風
なまめかしわかるゝ蝶乃うかれ　一雪
打よりて縄解てやる猫子に　塩車
手をつらて奇りあくれば蛙かな　山陽 宗謐
ゆるさくいまあひ分ぬかなくつゝな　落梧
あらうつるあひつしさうに鳴蛙　越人
いくすへも骨折る岸のかはづかな　去来
飛入て志はしあゆくかはづかな　落梧
不図とびて漕て居る家蛙かな　濃州 雲下
中々や池の蒼烟に行かはづ　一井
その隙を見めひ見る蛙かな　柳風



櫻桐の葉にとまりて居る胡蝶かな　柿餅
出替りの中をおりぬるてふてふ哉　炊玉
かれ芝やあたゝめつゝて飛胡蝶　百葉

菫草

何の氣もつかぬに土手乃菫かな　忠知
ねぶたしと馬には乗らぬ菫艸　荷兮
あさらくの土と依る菫かな　野水
墓もなき日乃さす洞乃菫かな　舟泉
草刈て菫選出す童かな　路草
ゆく蝶乃とまり残さぬあざみかな　嬉遊
麦畑乃人見るはるの塘かな　杜国
はげ山や纔乃月のすゝき哉　大坂 式之

ほろほろと山吹ちるか瀧の音　芭蕉
松鳴る夜や吹かれし夜の文　野水
山吹とてや折されぬあらし哉　卜枝
一重さへ山吹の花咲にけり　嵯峨　樵雪
とり流しく山吹のさくいさみ哉　日　蓬雨
あさふくもゆくとも志らぬ燕哉　玄来
去年乃巣の土ぬりなほす燕哉　俊似
いそかしく寐ぬよりの燕かれし　長之
蘂の巣を覗けばもとえうれ　長虹
黄鸎にあらてさされるつゝじ哉　嵐蝉
友稲くゆするゝの春や萩乃原　旦藁
角落てやすくもなる小鹿哉　蕉笠



あら清き親は浦の汐干哉　越人
杉の子も月しかぞや桃の花　傘下
人妻も心と隠るゝ汐干かれ　三輪　友重
山中は花咲かへる躑躅かれ　荷兮
樹の下やあふらくて志らぬ花の花　兼正
舞ながら花の中にてけぬ胡蝶哉　亀洞
永き日や撞実路もくれなくて　卜枝
永き日や油しめ木のよはる音　野水
行春のあとを語るを残けり　同

初夏

ころもかへや白きを撫る目つかひ　路通
更衣襟もおらずやたゞの身は　傘下

ころもか入りもさして見んと秋は　釈 鼠弾

百柏老人のかちなまりしあらし山より
香をうつしそふむけふ文鑠られたる
むしろの紙截人られてあるを忘れ
うらく帰るりそその比文牘よやつ終れる

艶に讀香もありて紅更　荷兮
山路かな

なつ草ても一つ草の一ツかな　芭蕉

いちこつを折して分けんまき流れをさ　一井

横北春乃いろをまてふる花香には　越人

切らふのりくの葉をとりかえ櫛かな　濃州 不交

いふ萎るかなきくふなら冬枯の木かな　同 落羅

わけなふくその本しのわらの葉は　亀洞

ひらしとこふそろふとかる旅ぞ　竹洞

ゆゑなりして花の大ぶあそゆきへは　池可

あけ嵐や下ゆく氷の沢かな　夏人

上ケおそ日の籾とりて麦一穂　玄察

積みてをる麦をるこ見たる甚麦かな　生林

妻からて蠶の木えらり　紀州

むきさかりふ来るて里乃葵は　涎可

志らし蕎子のまえる茶や隙の気色　嵐葉

暮る花くあるをけりしの一季は　落梧

冬し蕨く赤子実を見る冬かな　岐阜 李桃

大粒ふるまてるかし芥子の花　東巡

若ちりは聞へて捨ぬ茶子のみ花　吉次
涼川乃こゝろやく
菴乃秋もまくしらくなりぬすゝきにて　嵐雪
さびしさ乃りぬ皮ほかえれ出つる　野水

仲夏

五月のやみを拾ふてとふ蛍かな　猿井 元輔
刈草乃つる屋ふかくとまる蛍かな　一髪
窓くらき障子とのほる蛍かな　不交
闇ぬよるをくらき人呼ぶ蛍の卵　凡留
屋細く逃られぬ沢の蛍かな　青江
あか乃水を下たるまり蛍かな　含咕
くさまくら袖よりて出る蛍かな　卜枝

香淡く浮かる袖乃はなれ　路歩
よし野てや藤室まてもちる桃はなれ　梵芳
ころもくしのとくわかめの新芽かな　今春
坂乃むかひて梅の一本の暑さかな　杏雨
かやりや下に障子せ分くあり出かな　二水
るれ小れ傘乃ころもれ小坂かな　一笑
坂乃渡して羅のてまつりかりかな　胡及
奉の寄をうけれる座ち乃蔓かな　見竹
汐引く蘆のまきたれ若わかな　此橋
星伸へく蜩百合草わくれ目結かな　長虹
竹乃子かたり幌さけくもれかな　去来
箒れ時よりて去つもしうの竹

関越てもこゝてもあさき水鶏かな　丹ゑ

みゝ〱毛に柳きハゆる汀かな　大津　一彳

この比は小粽よみりぬみ月ゐ　尚白

舟ゝ女ハ傘にまきなきをるなふ
　汝草かな　亀洞

杉りろくさしさそふ螢縄かな　貞室
　杉あし〱かく

目りろゝてやかましき螢かな　芭蕉
　おかしく

螢のつゝに角こわれて嬉し　荷兮
　は

声あらハ鮎も啼らん鵜飼舟　越人

先ふゝ乃款かやらぬ螢かな　大津　淳児

曲江ふ角乃又えぬらしつ夜かな　梅餌

鴨乃巣乃見えぬるかわるハかくれ竹　路通

杉笠の深きを見さる夜舟かな　卜枝

虹乃根をかくれ舟乃標かな　純可

蘭乃香や漸ときを取る首のゐ　仝

拂ゝ手や浅茅きえ人とこし山人　越人

にしや折乃こゝ夜のあさき　落梧

夏の夜や木ゝに寒き簾の里
　庵のかまちに　且藁

すひつくすことろふ夜乃虎儀　其角

夕かほや秋ハいろいろの瓢かな　芭蕉

ゆふぐれの声あかむハ人乃声つめく　丗水
夕皃ハ妓の鳴かしのたしさハ　似やし
山路来て夕皃見るのおもかハ　津島 多柳
名ハ扇ら海夕皃に似るくもし　長虹

暮夏

梢も動くやうし蝉乃声　昌碧
もしの陰婆々ふたるむなり　丗水
夕立に傘めぐる垣根かな　傘下
おしさに腹もやしぬ末ぞ　玄蹄
涼しさよ白雨あがる入日影　志来
簾しく涼しや窓乃ありか口　若雫
くさき花に渋あつし墨かな　門



わかれ乃人に逢ふ夕すゞみ　鳴海 如風
飛石の石龍や草乃下すゞみ　津島 俊似
涼しさや楼乃下ゆく舟乃声　仝
挑灯乃ゆれて中ゆく涼み舟　卜枝
すゞしさをこすれてかゝる川明かな　未学
吹ちりくる乃くつわ蓮ゝの跡　岐阜 秀正
蓮見むと目ふさぎやきハつくとも　松坂 晨風
なにはえの草葉にこゝろ蓮よそ浮なり　古梵
河骨にかゝ乃やわらかあはれハ　芙水
すゞしさは松乃古葉かな　長虹
すゞきりて汲千乃沖乃浪かな　俊似
連ありき待せて涼に走らん　文瀾

引きかへす馬のあとより志ぐれけり　漆月

かくれ家も淋しき程の志ぐれかな　尚白

雲ゐをぬれて猶志ぐれけり　一髪

出かけしや墓を時雨て根強く　ト枝

麻の葉の皆こぼれけり雨の路　岐阜 李晨

汲溜し後に付けて冬ぶかし　越人

綿乃花ちらし葉に似たり　素堂

初秋

ちらしなや麻かるあとの秋の風　越人

桐の葉や出る川かみ人坂の風　圓解

雲鳥雲雨の古ずく

一葉散るかし澄きえけり　仙化



うらびしの切なや秋の名もしき　津島 方生

男くさき羽織を星の手向かな　杏雨

のら鳥で鳴蝉志らぬ白さりけり　芭蕉

蘂や姉花の中こそ玉すき　文鱗

あさがほの白さハ家も入ぬ之　荷兮

子を守るものまつり白よ乃て

新秋をそのまゝ宿のかつての　冂

篠垂れあさ夜行ふくつゆかり　路歩

あさかほやひくこの水に猪月　胡及

荻かより駒に撫つやゝやまの音　嵐弾

秋風や志しきたらまほら人　去来

涼しさや作家より須鱸この夕　昌長

畦乃そ菜の穂まて行ゆるいちかそうに　鼠汀

まつむしハ通る後より鳴なりけり　一髪

きりぎりす墓淋しく鳴まくらの　素秋

あの雲ハ稲つまを待たよりかな　芭蕉

いなつまやきのふハ東けふハ西　其角

ふかれてもかれぬをつゝや萩の花　舟泉

ひよろひよろと猶露けしや女郎花　芭蕉

棚作んたしらさらしき藤袴かな　作者不知

艸かりしかしぬも藤袴かな　伏見 任口

こぼれきれて番鶏を家にする落穂かな　荷兮

行人や堤をおりし(?)ひよ鳥(?)落　胡及

宗祇法師乃ことをおもひて

世にふるもさらに宗祇か庵の菊かな　素堂

としとし乃物乃根をさるさまかき哉　俊似

仲秋

かれ朶に烏のとまりけり秋の暮　芭蕉

つりしく冷をつくる秋の扇かな　加賀 小春

谷川や茶の露けしく秋の枕　洋誘 益音

石切の音も吹たり秋のくれ　傘下

斧乃ねや蝙蝠出る秋の暮　卜枝

簾の音ふる人乃鳥入れぬ人へ哉　一髪

田にも畑を持たぬ家のむ草の哉　伊勢 一泉

山端に鎌路る跡ゆくかりけり　岱水

行雁や夜ふかき人乃瀬乃間　其角

しらぬ人と物いうて見る紅葉かな　東順

藪の中ににしきちらしうき桜かな　林斧

とくとなく地にそゝける音の気色　盤和

ワの字にもとくこそ秋の草葉かな　宗和

ワくの字葉まくらのしれ

恥かしや錦なかりて秋とおもひけり　加賀 小枝

素堂老人をいたみて

たてすの家のぬけつくしたる蓮のみち　越人

一本の芦の穂瘦しかなしさかな　防川

松の木に吹あてられし秋の蝶　舟泉

もつらして待しれぬ蜘蛛のをかれかな　胡及

初雪もかからぬ竹のきゝめかな　曉雞

関乃素牛にあひて

さそ旅路えやしき枕蟋蟀　甚角

よしのにて

きぬたうちて我にきかせよや坊が妻　芭蕉

いとかしこや我なのの元乃夜這星　加賀 一笑

暮秋

なかなかに拂し栗の白さかな　巴丈

志ら菊のちらぬめでたしきほし　昌碧

山路のきく野菊も又ちりかゝり　越人

一かぶしぬ菊れ花さかり　曉雞

旅から家にかへりて

よそに居ける言葉にされけれて

かはらけのゆきさえつもるや菊の花　其角

菊のつゆ溺る人や紙帽子　同

くかまなりて菊作つと折りかゝり　二水

かなかりて萬さく宗の垣ね哉　伊勢 千閣

淋しさは檀比実落るね覚哉　濃州 芦夕

駈る菊もの乙しれちれや梅りさき　加生

芦乃穂や中の〇くらゐまりちるわされ　路通

初冬

あきつらの乃そ利しとめぐる時雨哉　潮春

ならなの人へまつろうは
一霰にあく三弁をくみ時雨　尚白

そつるれ折りひ出れこ乃夕　湍水

万句興行にて

見ころ逢ぬ人のやよまれ時雨哉　荷兮

人をも待てゐる日もし
ち難さ杯ところへるしくれ哉　落梧

鴉のゆ乃水際のこれ志くれしくれ　炊玉

淡し守えり蓑着るしくれ哉　傘下

こぼれしふこる乃月乃婦さちるらん　荷兮

一葉ゝて柿乃葉ちるや霜よかり　一髪

このそくく泪さ淋しき田畑裏哉　同

枇杷乃花人乃りさりて赤淡れ　同

菊乃知れよのくつゐまつくる哉　李晨

稲子の花志くれにぬれて物淋し　野水

華の虫のいつくらつくるや帰り花　昌碧
麦やうさく寺ゑ庵まかりし菴かな　仝
のとかしや吉野やく比の石うく　一井
猫ののと出るみくわる火桂かな　落梧
石臼の紋れくおりしやつその花　胡及
走くもとくさいのての又橡かな　文鱗
あたらし紀伊顔よかる菫うれ　卜枝
みを桔ま風の仕ても吹き冊うか　洞雪
蓮池のうちからへゆる枯葉かな　一髪
きらきく石もつまほくかれ冊かな　松芳
こがらしに吹よくまどうきるの巾　杏雨
きる粕のにかきくる華の那　蕉笠



冬月
煙を出く夜く月を面白き　北丸
あさ漬の大根洗ふ月夜かな　俊似
仲冬
杉らし抑く時雨かある霰かな　集篇 務吉
きりし流くつまさくれかしの霰かな　同 室治
捻よするる筆まやりし的霰かな　誹斎
紫のとをはくくる白むあられかな　李雨
いくくるさをおろせはあくまかな　宗之
家の紙せんさんの実のこぼれけり　杜國
五柳の葉のまかつんさる氷かな　務吉
深き池氷のしけま取きけり　俊似

つきつりてまつ葉ゥきけり蔦氷　塗風

赤松を行てみしあれ氷柱かな　秋舟

兼題雪舟

嫁より雪舟乗ところも堀来かな　嵐渾

ぬかつくりも雪舟に乗るにくさかな　荷兮

衣をこぬぐ雪舟手乗るをかへるかな　長虹

見る風より雪舟川出れ乾のみな　一井

雪舟引や使ひも雪にまみれる　亀洞

つらくなく杉の雪舟のあしや絶かな　倉咕

ま海の羽白黒鴨赤かしら　白炭ノ忠知

雪舟引く中の路なる衛氷　亀洞

新鮮をみてもあるらん友千鳥　村俊



井みるるその六月かな

並かく男八条裸あり

汗出して谷に実こむ氷室かな　冬松

海氣揚の畫埋あさき氷むろかな　利重

炭竈乃穴ぬくくや蔦けり　亀洞

藤篭手律に出るさむさかな　嗒車

火とほして我見なぬ冬枯　加賀一笑

いつこりし庇紀せはみ津なき　亀洞

冬の並竜のまさるのそりんけなら　苔蘇

歳暮

餅つきや門に杉れ酒くらひ　李下

吾妻くこぬ抱なり年の暮　尚白

よか花の後をもしらでちるゆふ　野水
寒る近く櫓つくりゐる菜畑かな　亀洞
煤はらひ梅よさげる瓢の形　一髪
春雨の月さてくる人の留守
とて柿の実出る稲くる年
の菜をとりしなかれかきりなきとて　荷兮
としの暮れ柿の実一つころくと
門雲をうるさく蛤一つおかひ　内習
田畑よ嵐道ゆふよのそよさかな　亀洞

雑

年中行事内十二句



供屠蘇白散　荷兮
いそけ鬼やとりて あらためける人日
春日祭
ましらん霰の菱の清しかな
石清水臨時祭
水おとも高つまかさんさめかな
灌佛
まつの目やつめてま洗ふ佛達
端午
杉の痩く菱付る形髪房し
施米
うち明く刈とられ菜そ虫臭き

乞巧奠
竹の葉にも星七夕まつりをふくまき
駒迎
爪髪も旅乃よそにやかむ之
擬虫
草の露にや足乃おれるきりぎりす
十月更衣
忍しきれ衣之もしら色の花
五節
舞姫にぬきひ指をおらぬり
追儺
打それつや眼にまつる鬼の面



詩題十六句
今日不知誰計会春風春水一時来　野水
水なし流れ波さゆる春の風
白沙落梅浮澗水
なかるるのにそれ伴ふ梅白し
春来無伴閑遊少
花買にいみじき花のもとに蝶の来
花下忘帰因美景
藤入ぬとのいきせる花の下
留春春不留春帰人寂寞
花ちてちるくらはの母ちゆれ
厳風吹袂衣不寒復不熱

綿脱ぎに松ら寒きよりころかな
池晩蓮芳謝
蓮乃茎も折ぬ高ささらに寒けき
暑月貧家何処有客来唯贈北窓風
涼気して切めきより北乃まど
大底四時心總苦就中断腸是秋天
音の旅をまちて〳〵八月し秋の空
秋来風高後秋氣颯然新
秋乃雨されば風ふつ人まれし
遅々鐘漏初長夜耿々星河欲曙天
露と云つさらひとまりあつて秋そこき
残影燈閑墻斜光月穿牖



獨り庵や渡る鳥まつの月
万物秋霜能壊色
冬菊や素き影てつゝむと秋乃霜
十月江南天氣好可憐冬景似春花
こかれしもちりし息つく小春哉
寂寞深村夜残雁雪中聞
行さまもこゝぬかしや雪のうち
白眼秋後佛名經
佛名乃わけ腰懐く白髪かな
從国乃擬ひのこし淋しきも
さまをくれけりしくし
鋸鍇目立
かゝるよ乃夕日ふいろきつかり六
一舟泉

付木突　まくら関東てさ流し人乃家

釣瓶縄手　やつるさや酒のまゝよ保秋の里

糊賣　あさ夜乃きぬ打ちむつくもなき

馬糞搔　乙かしし乃松葉茶かきとつ孝気て

李夫人

魂在何許香煙引到焚處

越人

かけろふ乃抱つきし心のうちも水

楊貴妃

雲鬢半偏新睡覚花冠不整下堂来

もろ風よ帯ゆるさる森白ら那

昭陽人

小頭鞋履窄衣裳青黛點眉々細長



外人不見々應笑

ともの数寄やむかしの長の伝あらん

西施

宮中擬嫁眉姿不敢吾是愛君

照あらし植えくらし牡丹ゝ那

王昭君

玉貌風沙勝畫圖

ともれ来なもまなされぬ冬乃都外

一日うきをおくる紛らし

卯　森やの設や古郷彼境なき出でけ

辰　杜若生ん絵書乃出来る日ゝ姓

巳　講釈乃眠ましつまる扇ゝ那

溜宿

午　水はひよ藍竿上を踏わたりも
未　櫻乃言ふ武家乃夕含さなり
申　夕月鳥や鶏しゐるそゐ飛り
取まあそて生を多川るゑ飛ほし

山獣　藤笛乃上手をつたへあられさよ　樹水
毋禽　鴫突乃ほ新長き白あし　弌　児竹
里虫　枝多とり虫とりまほ蜀黍の杭　含咕
海魚　おりしらと鰯川乃盆乃月　仝
川魚　秋乃暫鵜川くの火ぬり弌　含咕

牛馬四足是謂天落馬首穿牛尾
是謂人
一　ゐもて梅さく桃乃接木の杭　越人



藏舟於壑藏山於澤謂之固我而
夜半有〻力者負之而走
かくるゝ師走乃市まうるさるゝ
幾聖棄知大盜乃止
七夕ち拘ら手すとよもなききむらし
鋭者夭
散ちそて治ろさりの八花火ら杭　桂夕
鈍者壽
鶉絵の鳥まなきるさ秋の那　市山
藤房
ほとときは鳴てむ時をまつなり
師宣　一井

うつくしく人にみするゝ荊か花　也虹

一休

ゆかしさ乃かたち取りしや月乃雲　湍水

法然

鳴鳥乃法くろひもあきらうらハ　嵐深

山岩

打く山に藪に蔵るゝ岩乃角　湍水

海岩

苔ふかし浪中に出もあかりけり　仝

名所

八重垣す奥をつくる新田ハ　杜国

しら魚乃骨や式ある大江山　荷兮



から崎乃松ハ花より朧にて　芭蕉

葉一把かさして君のるゝ汐波すハ　湍水

海縁海くさつんてあゆみお登　荷兮

琵琶橋眺望

高ゝ泳る鬼嶽さゝむさき汐まかせ　含咕

関こえて宮もかたりしかさきかハ　宗祇淋

笠取国関にて宗祇乃山崎に居の
嘘るゝと見へく嘘しすくしや

芽出かく布子売れし定衣　杜国

麦うつや卯花のちきさ志賀のさく　重五

さ月雨にかくれぬものや瀬田の橋　芭蕉

湖乃水まさりけり五月雨　去来

斗もなし今朝乃あらしの三日月　一髪

角田川にて

いさのぼれ嵯峨乃鮎食ニ都鳥　貞室

みよしのをいふに秋之見乃寺　破笠

いさよひもまださらしなの郡かな　芭蕉

夕月や杖にみなふる角田川　越人

九月十三夜

唐土に冨士あらハけふの月もみよ　素堂

明る夜乃てるやてるてるしゝ羽田かな　胡及

明る夜を芦直津乃あすのむさしかな　渕支

武蔵野やいくあともみる月乃白　舟泉

湖を屋根からみせん村しくれ　尚白

かし涛やしちりわたせく砂明ず　伊勢 泥友

むさし野もはつくみの日ありけり　洗悪

先つくしと生海鼠を焼やふの奥　俊似

西さまれの桔槔やをのおく　津高 一笑

宮の冨士せまや初もぬかなり　湍水

まし津山も降大宮乃夕べかな　野水

早瀬乃やくとえとしや鳴かな　芭蕉

歌る乃日や不破の中家の帰掃　如行

旅

雲雀より上にやすらふ峠かな　芭蕉

大和国平尾村にて

花乃陰謡に似たる旅ねかな　全

桜咲里を眠ながら通りけり　夕楓

日乃入やふねよそへ行桃の花　一髪

のとけしや湊乃昼の生さかな　荷兮

出つ川暗くうしろに松ひぬる
　ある人乃銭ぞくり　芭蕉

わらしきれ湊かさねて笑ひけり　除風

麻の中ぬ手合焼ながら明やすき　秀松

数ところかられ歌唄る旅疲　昌碧

あらしや桂川を出れば市乃家　松芳

夕立のあとの大名も一声けり梨　傘下

　芭蕉去を送る

稲妻をしてつきたる別かな　湖春



なつかしく殻にすゝけ秋乃蝉　一井

あさ風に中ゝる白さるてられ侍　野水

拍いとしさく秋乃かなしさよ　舟泉

男なれをすゝきを松にかへしぬる
　さゝしあまりくさむらかそて　嵐蘭

更級乃月を二人に見にけり　越人

　越人旅立乃時しのゝめ京にいづる

月に行脇指つめよ馬乃上　野水

おくられつおくりつはては木曾乃秋　芭蕉

猿乃鳴花七ちりの秋のいかに　路通

　将舟補よしのに拍其角乃をおむけ
　まかくれしとてし

稍秋積に廿を重ねて秋乃山　荷兮
しほりし稲も青も残りけり　京 ちね
入月に寄せ来しりつはらに　丢察
能きけそ秋の部らう川きぬさん　一井

品川らくへんにまうでて

澤菴乃墓をとふれ乃秋の暮　文鱗
料枕ならし次に乃夜乃鉢　芭蕉
旅なれぬ刀うしなふや村しくれ　津島 常秀

鳴海にて芭蕉子に逢ふて

いくかさねもれ付と袖もほころびて　荷兮
箕をえし羽織ら綴乃文になり　野水

其角にむかひて付



あらあらさびしきり舞ひるみの宿　荷兮
天気よくくもれれ多めかく雪乃暮　越人
かうろ尻乃鳴るまくゆく子ならぬ　釜下
里人のまうりゆきたし乃雲　宗因

越人と吉田乃驛にて

さくれと二人旅ねぞさのしき　芭蕉
旅藤しらくみしや浮世の蝶掛　同

述懐

草庵紙褥に出る附

きゆる附と秋のきこえてしるしる　路通
子をも猫身りらく田の赤蜻蛉の郵　吠宜
余似乃田乃螻入ぬも浮世かな　落梧

高野にて

散花にたぶさ恥けり奥の院　杜国

様見へくねるあさましき倉哉　梅舌

高野にて

父母のしきりに恋し雉子の声　芭蕉

あや見えさん新さんそのつゝ哉　落梧

さうぶ入湯をもらひけり一盥　日

一本のあすひもあかる綱哉　杏雨

肩衣を綟子にてゆるせ老の夏　杉風

似合しや白髪にかつく麻木売　亀洞

たかり十日末来ての声すなく

かられ家やよく見え葉の中に待る菊　嵐竜



うつくしさを貪るきくの垣穂哉　暁鶏

人の庵をたづねて

されはこそあれたきまゝの霜の宿　芭蕉

旧里の人に云遣す

こからしに萩葉によする小家哉　杜国

鎌倉建長寺にまうでて

落葉かく身を浄にねたる寺の庭　越人

ある人の引こもりしを見て落葉を

一葉拾ひて

あつかふる落葉に焼や鳥さうり　荷兮

古仁乃のぼり出る暁に

まなこち然乃暖甫や冷ん猿の声　嵐弾

梢乃雲ふ影をさし行ぬ哉　去来
月や遠く耳やちかきかひとしの音　西武
婦るさゝやく瞬乃情に涯年乃暮　芭蕉
さゝやくの色しを投りふく雲の音　除風
恋をまゝくして智貫先ふおしらふ
行年や家を志つくさをかくしけり　越人

恋

まちの母まむある人乃妻無かり　里紀 一有妻
きぬ〱や余りをしらぬ時鳥　除風
恨み出く床をわれさる別哉　長虹
むしりたる乃月に立枕かな哉　文闌
虫干に女稚がすゝける女の郎　多文



さらけめし妹が頃の八葉まかり　心棘
白粉黛無額髪
香園乃稲妻消えや月の数　長虹
一花くさ人佇うぬ雅をとる哉　尚白
さひしなれるは
つまれしと家をもしれず女郎花　荷兮
志りあらぬ花も咲るつまなし衣　小春
妻乃名のあとえりし旅人まり通り　越人
松の中月別乃旅乃ならぬ哉　俊似
振むひ火燵を明くいふむ　舟泉
うらむねの火燵消ゆる別れ哉　嵐蘘
山畑よりの忍びや若菜川　松芳

きぬくと雪散かくるて戻りけり　冬松

打よろしやきぬくの比弥生き　昌治

無常

未朝よ

散る花と東西に阿弥陀仏と念仏　守武

業平迹連

咲川散つ乙のあきさそしの畠かな　傘

末期よ

東西や空さへ明のほときさん　堺　元順

松坂の浮瓢よ人の手まくり

よるよいひける

橋のたより散るぬをけりや　荷兮



いめくしの退をさてけ

ゆめくは昔しく潜る蛍かな　京　六茶宗

あるくしうし取りれの射すまん

おさ花の小風よ見ゆるちるなく　乗亭

世をそさくて妻乃身まうりたる比

我舞への相の花よ乙し　雅水

辞世

あと称し焼竜一つよき工新

うまきれたる比

似さ新乃あしくもえ一躍り　落梧

一原世をかく

よく雪也小町や○のかへのさま　鴻雲

妻乃追善に

ちらし去年の里人ともれおのむ　自悦

本年ろ妻乃ことなりしさりとて
拾ひきひやかくひゆく水をかし　去来

はつ新盆なりし後
その人の鶉さく形し秋の風　其角

母は扨これかる子の名残を
扨さる子や色より会ふ秋の暮　尚白

ある人の追善に
埋火もきゆや泪の烹る音　芭蕉

旅ねしてみまかりし人が
あハれのしのぬらに消にけり　嵐雪



ゐる四せくうをやの花の月　小春

釋教

伊勢参宮
神垣やおもひもかけず涅槃像　芭蕉

暑くしるる母おもふしりの稀人像　嵐雪

西行上人五百年忌に
ちりきらて見る月讀るさめかし　苔雪

扨和し遠忌よ
連翹やこえて白く志け散なり　胡及

うしく首に露の葉もとけ二重か　杉芳

本願寺もく僧も通りの雨乃花　社國

待りなるるをこ顔てたくいの寺　冬松

、御ゆかし偈にも俳人さかりけり　其角

息子つきの人辰乃業添生一日
東照宮乃別當僧正乃御房に参る
大所近侍雅の法華八講の侍る
よしありきぬるのおはれん経の空のほとゝ
衣品乃こゝろ哉

散るはな乃帰りみちたむらしき身かな　遊人
女房乃馳せかはしき法華
思ひ捨く惜きさはりの龍女成佛の
ありかたくも宵のひあくれ鼻かむ声の
しりにそ　日
ほとゝぎす鳴る澤や雨の露
鶴さなき尾上乃桜咲まゝに　俊似



古寺やほうろくすての菫草　一井
八番ふく
海士乃家聖よびて孫生代　伊勢 千閣
咲まゝに乗合人念寺の紅牡丹　一井
夏山や車漕くの江湖乞ひ　燕葉
まつらふくく
流佛の日よ生れ逢子廉乃子に　芭蕉
灌仏乃そら淋しきにかさゝぎ　尚白
そまり世ふく
腰乃あふきと乳飲乃かに　一壺
許る寿く菴一日乃清水かな　加賀 一笑
十如是

わのしたに流れて通るしみづかな　荷兮

即身即佛

夜盗乃雲に帰らん乃佛かな　愚益
ほとゝぎすや僧の經よむ夜哉　嵐蘭
かれ〳〵や門にてあまし施餓鬼棚　荷兮
おうけ乃火をとるむしのなきさよ　撥丸
石籠ゟ施餓鬼乃棚のくもかな　文里
魂祭ふりむく梨をそむけけり　亀洞
かくの通りの道すあく僧が無氣かな　卜枝
撥待のなしらつえて松の法　野笙

平等施一切

撥待てよる程の人をとも施みり　俊似



稲妻は大佛ならむ無弁かな　荷兮
堕獄は引導欲くなきかな　卜枝

ある人の作の吊拍ありて水語ゝ練は不食不図るんを感じて

袈裟もさえてゞまたす

落く〳〵ぬの佛なり茶いのぬてて　荷兮

あるさ乃奥なるは

爐は寺乃鼓わすりゝて　甚角
念仏の堺はかりや肉の弟　一井
諸乃うちに希緑を乙ろ法師かな　卜枝

人のわしはあるてよしまとし
ありがすてゆくれぬかな

衣更て又たれしかり一附西　嵐璋

縁会乃安國論すらふさ

なりしさの涙や直ま沢るらん　其人

古寺乃雪

曙や伽藍し乃雲又雲　義今

日

雪拂やうしる二星乃月朧　俊似

つくりなくこなされ夜しま仏　一井

紅葉する人のさかやか鉢とき　文圃

千鉤かるもかせかし道のふれ　具肖

薬王品七句

如意者法火

すつ句るむめの咲くり言あを亦　胡及

如禅者得名

雪乃目や風梢捨てあまの家

如商人得主

双六乃沢ぬてよひるむつの里亦

如子得母

行さくおけるとつくさけ亦

如渡得船

月乃江漆乃桜本きるまり

如病得醫

かくしき清くのふ夕付る山通亦

如暗得燈

秋乃松やわひゆるしきに紀さて

神祇

古るや昔志るうる獅子頭　鉛雪

二月ちるみの垂絹ま

ねさゝきや井守乃月の梅　荻丁

志ん／＼と梅ちりかゝる庵哉　同

覚るも夢あひてこそ神乃梅　亀洞

上下乃さゝしぬやうに神の梅　昌碧

社のかたてうあうかり梅乃中　鉛雪

何となくわれかとゝ梅の花　哉人

見ならくあまなてさゝる神の梅　舟泉

月代も志ろしや梅乃露　雨桐

門あけて梅乃瑞籬われみたり　宗之

絡るつゝる人の後乃さかりかな　去察

花ま乗く藁苞かさゝつゝる社かな　純可

宮乃後川渡つゝるさかりかな　李桅

流ゝ渡乃本社乃中の垣乃梅　野棠

ほとゝきし井杵の井を通りけり　玄棠

宮居乃灯をりゝる火串かな　亀洞

破扇てゐまゝうし鳥居乃梅　未学

川の魚追一羅寺々さしかゝ流乃梅　荷兮

こかしゝしや里乃子取く神楽歌　尚白

此月乃あつき沢八ころもみかな　松芳

みさしれや禰宜乃さゝける油筒　落梧

若菜摘納

きゝしらぬ翁も嫁し神々楽　利牛
紙乃男も像盈れ秋の神楽哉　野水
須磨川秋明乃旅見神楽哉　昌碧
かつきれ神主ふりさ庭火哉　村俊
松枝や作り桜から爆もひ　卜枝

祝

肩付に人くはなりぬ光楽く　冬文
蕨野の早午乃丸ま　亀洞
蛍まで竹を修まて此ゆるかな
君か代やころくまれさ玉つそさ　越人
まで芸を紙雨とまれ神乃石　傘下

いきゝと海道乃上も杖つかん　亀洞
千代乃秋にあひは志るしこゝし米　旦
志もらしかくれ間ある人やまもし
先祝へ梅を心乃冬籠り　芭蕉

曠野集員外跋

誰かいはく花を杉をたてゝ世に出されぬ中
にありて鶏のなしきを又三拜　東
四時の林森のいかく花乃さてろいこれ
をかしとて佐川田喜六のよしの山
あさなしとみる歌を実ならんず又
妻喰し居ると申へとかゝれけ
此句尾張乃野水子乃作也と芭蕉
翁の待しをさとさるにさいつ
比田舎へ居をうつして実に此句を
感じてむかしあまりなる人の中
に定乃拙純せしをゐこみ追はれる人



来りて独色を愛しなかし誰の
知音えらしきらるの花の上に猿せ
世のすく実を甘る三声乃あはれにとゞまる
も實乃字老杜のこゝろあるなるや
程居の句を志しして
妻をかりまれ蓮の松にれぬ[illegible]
この文人乃みつりてとけれ
しを三人開きし義なとも咲しきて
多をさしかゝれ雪乃かけるふ
橋の路も志らゝす毒乃まあく
ものまつらなる杉くし萍らり
門の石月待園乃ゆきしゆり

素堂

埜水

荷兮

越人

水

風乃肩利を動秋乃雲 分
武士の身まかりしもしらぬ逆し 人
志とりまつりて懐乃ゆるむ 東
窓より得しを空をいるまつんく 分
坊ありしなかれてるやむふりし雨 人
立ちのき杉間ちる石乃鶴 東
千日しらぬ山乃てらす 分
晩きあらし一重摘し咲残り 人
あなうしもかまきりよ月夜かな 東
高の才八渡の中ふる秋あらひ 分
秋深みそなく主人乃妻 人
惜しみ西も東も鐘の音 水

さゆりあかる利根の川舟 分
奇乃日のてらしとしてきさ雲る 人
酒あまりし網鐡うちならして 水
ふかくしときの家の堀いかさ 分
孤つきしや人乃こゑかる葉 人
柏木乃腑気の味乃つくくと 東
さゝやくこのことふ哭えつる 分
肩乃梨より合まり辻来撲 人
秋よあるより里乃湯桶 東
露しられ昔難に出るをかけく 分
うれしと恋の小不破乃恋花 人
加しこゆる諫よ涙こほれし 東

火箸のたてゝる夜のあつさかし　兮
くゝりもの見せつし人の立かゝる　人
みせさしらんく池のかへるを　水
哀さの雲霧もつれさ定らん　兮
旅く芳露る幸か味なき梨　人
里る紀ん名月ゑんわされて　水
大根きさむことゝ千にいつそろし　兮
遠浅や浪にしめさす蜊とる　亀洞
はつかみふみわたる湯の名のゝ里　荷兮
のとりしや子さ浪に蒋を解く　昌碧
百足の懶る菜きの梨　冊水



夕月の雲の白さをとくち詠　舟泉
秋そこの薄を揺よるしきせ　釣雪
萩の野をこしも志らぬ所や　兮
一袷さしして色も古綿　亀洞
色の登まえ垂やしる宜禄の麻　荷兮
乗きし袷と杉舟の年業　昌碧
いつくとなくてめつらぬ藏造　釣雪
湯香まうえのよ見むかしく　舟泉
涼しやと迷りくる川の瑞　冊水
さらかされしや千尋舟　荷兮
秋風に女車の髭行きて　亀洞
秋くと露らき猿猴の法輪　釣雪

時しくれのさへくてゐぬ花の雲　昌碧
八重山吹ハそこちらにちくし　丹水
月のさてやかふハ何せん膝にも　舟泉
むやみにすけよむとし蝕にて別　亀洞
何かくし笑やるあしの雨にて　荷兮
垢離かく人のうへその代書　昌碧
配所にて干魚乃加減覚えけり　釣雪
哀うふるる哥の西なく　舟泉
むく鶏にかつひつくく膝を　野水
門をとふり蒲子をひとむ　荷兮
聞えて足軽町乃藪添に　亀洞
杉のひ逢ふうれも吉田流　釣雪

盆もつまるそらりの下戸の月　昌碧
やまつ秋乃やゝあらまし浮　野水
つまらくも何そ隣る寮の窓　舟泉
手にも目を通さ安房の小湊　亀洞
夜の日やみるまる泥の照月て　荷兮
桶乃わたしをへしまひかり　昌碧
人あつまる脱をさして聟入　釣雪
つい覚られ為る精進　野水
為しきし餞うきそり葉乃水　舟泉
柳のくし乃かまきりの卵　杏芳
夕霧の涼み物しまてうへなん　冬文

きりきりすやうやく冴ゆる月影　荷兮
秋草乃とてもなきに咲こされ　松芳
弓ひきなゆる勝ま撲しらく　舟泉
乃ふも亦その拾ハむしうち出る　荷兮
毎月く砂乃中の床乃くし　冬文
大嵐乃楼のあれを鳴きく　舟泉
涙見せしとうち笑ひて　松芳
ことよりへ鴫さへして衣落す　冬文
酒乃中よ揺らうく無川　荷兮
十年かれもせんやおしき　松芳
とりまく双乗の絵をさきまる　舟泉
おふるもうち垂もさる花の色　荷兮



月乃影や亀井乃名　冬文
竹よあを招ひつまれ風　舟泉
数珠らうけく銀泉乃く　松芳
隠居も入道よ妻の志ハらく　冬文
十日のよく乃招しなるらし　荷兮
山里乃秋ゆらしと生鶲　松芳
長持かりつく久くるやさむ　舟泉
さふくしとふら招を落る月の影　荷兮
馬乃とくとれてゐるのいるく　冬文
まりしさう楽井乃声の名紀雨　舟泉
燕ぬまへく蓄妻あふつしゆ　松芳
つくしと帰きるみのうとまし　冬文

曉ふかく提燈あかりによむ　蕪兮
けしの花とるもとらでもちるまゝに　松芳
味噌するをとの漆さハりし　舟泉
茨垣乃門さしかける薪分　蕪兮
汲あらしよあくたるよ落ぬれ　冬文
毛の紅赤貝そへてありく鬼　舟泉
旅の人よりくる白旅ぎち　松芳
きさらぎや瀑布をもて見とこすて　冬文
そう面吹きし山口乃家　荷兮
介しきれ待ぬ人の形もあり　荷兮
雨乃ふるのおよそてる戸乃口　野水

引すてし車ハ琵琶乃かざりとて　同
あかぬれくも人のかりかひ　蕪兮
月の秋旅のこゝろさよいつるこ　同
一荷のなかし蕣のきうけ　野水
初あらしはつせ寮乃坊主衆　水
菜畑にむしくらふけもの　兮
土肥をたくしようきよ柿くふ　仝
下剃は神を抱て或　水
通路のついたりさけて逃かへり　仝
六位にありし戀乃うはきさ　兮
代かはるめでたき時に清おかて　上
殘一貫よ鰹一節　水

月乃秋常ほりまいそく世拜
花咲かしてんかまのあかま
天仙蓼は冷食あさしまの害
うきゆうのけよ宿経乃中
たく人とあゆてさねうちそ見
夕せもしき湯つひてやる
跖乃やと明月と信濃乃小六早爰
秋乃あらしま菁淨猴璃
絲乃らてもよそえれは久しき久娓
八日乃月乃ときとつるゆく
山乃端よ松と桃よのかさまる
きてさまんてふくらしとさる

仝 兮 仝 水 仝 兮 水 兮 水 兮 水 兮

唱青白や猿かけ引ふむすね
太鼓乃きまよ渚の本るゆ
ころし撲る来賓の草枕
暮らく乃よさと舞まわるる
愚ふとも志ぬ龍そ一二年
庇をつらく須弟うそらて男
三方のねむつてと笑まらる
供奉乃草鞋を登くさてを
涼くやの信大原龍涙の花
人松ひまりける乃川岸

月さしのゐる気又八豆乃石なあくまる

仝 禾 兮 水 仝 兮 仝 禾 仝 笹

杓面しろきに柄をさしたる団や
宗鑑法師乃句をすゝめし由まよ夜の
衣乃裾を結ひやれつきぬ
月に柄をさしたらばよき団哉
蚊乃おるさらり夜の衣の袖
ようすりを誰にか見せてみたらん
杉垣ひかりのうきこの寺の庭
吉車枝つらく枝をくてよりかゝる
使乃者に返事のまち又まちかねれ
あれこれと猫乃子を選るさまくに
としとるまで行あそびたり
ふえて十年の麻をさく捨どひ

越人
傘下 同 人 同 筆 下 同



まゝ折りたり仏たのしみ白
大勢乃人に法華をはなされて
月の夕に銘瓢混ず川
嗜に柳もよく柳も流し
秋のもしきみれ畑みの茄
日のまれいつらも笠をかつぐへき
麻子書るみすの中の出戸
花乃かげてくゝり廉房つ
光ものて数乃こゝさき春風
うち漕く浦の甘屋乃ひ干す
内へそりてから比々ゆる 大
砕きあんの名の飲ますわかれや

人 同 下 同 人 同 下 同 人 同 下 同

あくまつかある雨乃降出し　人
歌合稽古鎌倉まいりして　冂
まうさ歎乃ことばちかひなり　下
灯基乃油こほして押くし　冂
白を抜こそんまつりしを恋　人
ふく風に気のころ草のあつくと　冂
半ば越えん旅やすの秋　下
むつくしと月見る都の歌に似て　冂
人の情にハうとかりしとも知れし　人
にきりつく爪や首を落ひせ　下
千世俤乃こうふ町中　人
打ちうくと小法乃者のさか付なり　下



皆同志にかし　念佛　人
百弟もうらひ花も盛て　ト
田楽きれくく　様雖しき　人

深川の夜

雁かねもしつかに聞けばからびすや　越人
酒しゐならふこの比の月　芭蕉
藤ばかま誰窮屈にめでつらん　仝
理をはなれたる秋の夕ぐれ　越人
瓢箪の大きさ五石ばかりなり　仝
風にふかれて帰る市人　芭蕉
なに事も長安は是名利の地　仝

医乃おほきこそ目くるしけれ　越人
いそかしと師走の空に立出て　芭蕉
獨りせわやく寺乃跡とり　越人
此里に古き玄蕃の名を残し　芭蕉
足駄はかせぬ雨乃あけぼの　越人
きぬ〳〵やあまりかぼそくあてやかに　芭蕉
かぜひきたまふ聲のうつくし　越人
手もつかず昼の御膳もすへりきぬ　芭蕉
物いそくさき舟路しばらく　越人
月と花比良乃高根を北にして　芭蕉
雲雀さへづるころの肌ぬぎ　越人
破れ戸の釘うち付る春の末　仝



みをとさひしき妻のひきさはさま　蕉
呂あくて服紗につゝむ十寸鏡　人
そのかはりある神子の袖ひ　蕉
人去くらゐすさ法坐の匂ひなる　人
物陰に紛る堂乃片隅　蕉
知らくまれ氣のあらし気才よ　人
垣穂のさゝけ露ハこほれそく　蕉
あやにくに娘ハ妹にあなかろめ　人
何の雲をたゝる春さつむそ　蕉
打身のうちの見え消さうに　人
碓も遠く鞍にいねけり　蕉
秋乃田をかへせぬ公家の衣ひきそて　人

さいしあらく文字關によゐる　蕉
いろめしく庭乃末葉や　人
張をまとる子乃禮をうひなき　蕉
むかしは誘る義理も忘れまし　人
田やしとらつく啼きくち　甚

翁に倦たれて来る人の先つ月きさる
萩そよ荷分の文や天津丁　其角
三夜さの月見雲なかりけり　越人
菊萩の庭に畳を引つりて　全
飲くらひとも一筆をおくまなる　角
雉うあらく縄なりけるえ夜　全

齒きありまさく折りつよめる　人
悟さる涙かみさましまんそ　全
鬚剃茶に辞をましむる　角
空蝉の離魂の煩乃杉そ的しぬ　全
あしなりける今二万ある　人
いとおしき子を他人とも名付けら　全
やけとなとてみしつむりぬ　角
酒嬰さあまつきてるさ絶えと　全
魚をもつしぬ月の江の舟　人
そ笑いらの富士ハ淺黄よ秋の雲　全
むしさしける草乃一瓶　角
饅頭をくれきし袖よつるる　全

うき世につけし死ぬ人ハ損　人
西王母東方朔も目にハ見へ　仝
よしや鸚鵡の舌乃みしかき　角
あちきなや夕にかはる心の妻　仝
恋の歎こも見せて秋さへのまん　人
やれかひ穢し深き誓ち引て　仝
菜つゝむ高き師走しのり　角
夕暮宿乃もさゝ鶏の塒　仝
いくつの笠を荷に強力　人
究つちは塵こちくもし草枕　仝
ひいなをとりて修験の八朔　角
満月に不断さかしを迷めるや　仝



念者法師ハ秋のあはうせ　人
夕まくれおさらし発きぬのすそ　仝
弓をひきしる窓あけのまゝ　角
夜をこめる乞食の法守頭あて　仝
こゝのきしてうぬ馬士の篭とり　人
花の香にあきつき脇ことりや　仝
むしろ並へき喚讀乃ほ夫　仝
黍うらし新酒ハ人の碑をさき　嵐竜
秋うそてうきしいつも湯婦　越人
月の名書を引ちし仲わねて　仝
我面菜の草うけるかり　吾

さくのあめく牧はまつらぬ里のゐる　仝
川越られし堤下のこゝち　人
疱瘡負の透しくる村し歯の白き　仝
唱哥八しれし声ありやる　旨
ふとこみるてあれしのうき雲るよ　日
後そひよくいふうそてしふき　越
こ龝よりも池あらする玉ときき　言
行燈ともしくむかへる浪人　嵐
慕梅を携ふてそし一ツ脱　人
明日を賀そる宵の月影　越
去しぬの祥て浴める女房　人
つまるの医者乃浪姿や　旨



ちる花は月とうつれとも些　越
よみてゐましは何をいふらん　人
初音やてこしのひさる桐の杏よ　飛氷
日のみしうきしてそ乃紅記　落梧
山川や耨の啓あまとうれらん　仝
禊を遠ざかしつくるへうりうつも　飛禾
初册ふさゐよ柳会身よ草計活　月
あまうらしも櫃の萩　落梧
川越乃歩まされれ秋の雨　水
ねつして痛ゐる顔のきしさ兮きさ　梧
わくらせこそわりなくろくん椙の下　水

まかきあるに蛙のなきてひ　梧
みる秋の湯をもらしと水飲て　水
こゑくり郷をお役なん僧　梧
峯乃雲おちかかるを見おさめ　水
旅まくらうちのんきな藤さ　梧
息づさ弱子なれこそとも一文に　水
下戸八皆いく月の杉ならき　梧
耳や篠やとりて花の散るを　水
こほ笑免さするなよ乃新年　梧
いつやらも営み出ぬ此杉くに　同
山伏役て人志らぬなり　水
くわらくとなひぬけくる荒車　梧



挑灯もつて紅閨をたつ摘　水
伽羅を江戸ん髪を掻おろし　梧
志らく瓶をいそぬつれなき　水
まうしとやうる馬まうさのせく　梧
くらは府中城飴稀てまいる　水
雨やくく雲のちきる、雨や　梧
柳ちるなかくの菰　名　水
なれなく肉そさかれ五十石　同
寂しまよ秋を女夫旅まくり　梧
太もと上はよみさるうしもまし　水
黍かてとそれいふしへの酒　仝
朝てくの干魚焼ることり頃さ　梧

海より雨を先へひらく〳〵くる　因
素肴の〳〵の涼しさをしらし　水
縁のまくらへ雲の夜嵐也　栢
一里乃炭焼ともなき勢　嵐蝉
かき山の光の難〳〵る　胡及
さきくさや西去を引よ深〳〵ん　長虹
肩ならそられ酒によふ人　嵐蝉
夕月の入きは早き塘さハ　一井
たけくれ鰤をつくてむ秋　長虹
里深く源載に二三日　胡及
寛日〳〵妻にわかられて憂



同りなれても涼よ曲の宮すくき　一井
首数しくきく切かくく文　嵐蝉
うらしとく篠紀ならん湯をきさ　胡及
宮御し威宇の銭乃ま御　長虹
わすゆくのすそゝあかてハらち留　嵐蝉
蛉よりハらは女中ま剥　一井
浦風に腔吹まくる肩深し　長虹
みるも加してき紀岸の魂座　胡及
あ肴のさし矢射く捋るに紀の陰　嵐蝉
蒜くくふ香りし遠さりより　胡及
はるのくれあさきくと聴しん　長虹
硯のすの綿乃涼くに落つく

ことみしきたる内もさはしく虎　嵐渟
きや姿にてある媼をも絡うり　一井
本をさへにあつるうすし松の枝　丢虹
稗まゐる人もし乃奥　胡及
此年またりて冬の鋪をしらさ　一井
流れてもせはしなつい森へ内　嵐渟
筆とるもつく漆子乃陰のこゝろしき　胡及
ときしてはやうま玉遊む萩の花　丢虹
洗ふ乃袂入きのくる乃え子乃は　嵐渟
名引りする人乃足音　一井
毒なりし底一きれも喰なし　丢虹
所風ちらし色気白雨　胡及



板屋なさく蹈石なき庭乃内　一井
まろの勢けゆる東てき雲丸　嵐渟
ぬくくと日足乃暮れぬ花墨　丢虹
見ゆるまとかなまころつし　胡及

抑れんかの道ハとをく千古の浪花
ひけて崑崙山乃西にもあまねくなる
よりあられけるハさ浅ゑて男山にあをうる紙
なとも絵にもあらはさて秋津洲のくもく
つくさまれハかのあれはてさしもおのりそらしぬて
と海津乃さかいにつる山もこ利ちし志
うみおよひて海とふみその事かくとこりふ
きんことゑんおもへいふそのかくふなにふ家紀
世にて枝乃るすをとゝめし海され当をもひぬ
翁人もかくく神祥待りきまして神

乃ちあをよしとなる利くはんつきなるをともなひとも
うかれ行うしおもしろうしれいしつめなる
出るつきこそいはおしなせそれよりて
おのつしから あきもまくなふこうへしこの
ころおもひてふりの出和なる七ら乃みち
を一まもうとなしてものをもらくその奥
後をきつしめんと世にうけかのなし
大鵬舘主人しるす
安くけく永き三ツのとし
長月乃比

甲辰十二月求之